

アレクサンダー・バイコフ

## ソヴェート経済制度の發展

Alexander Baykov, *The Development of the Soviet Economic System*. Cambridge: Univ. Press. New York: Macmillan. 1948 (First Edition 1946), pp. XV, 514. \$6.50.

野々村一雄

### 内 容

序

- 第1部 變革期および「戦時共産主義」期（第1章 既存の経済制度變革の基礎たるイデオロギー的前提と目標、第2章 経済政策および經濟發展の主要特徴、第3章 この時期の主要諸成果）
- 第2部 國民經濟の復興と再建準備期（第4章 この時期の一般目標および政策、第5章 商業および貿易、第6章 財政・信用および貨幣、第7章 工業、第8章 農業、第9章 労働）
- 第3部 全面的工業化、農業集團化および割當制の時期（第10章 この時期の一般目標、第11章 工業、第12章 農業、第13章 労働、第14章 割當制の時期における商業）
- 第4部 國の經濟および經濟制度改善のための集中的努力期（第15章 割當制の廢止と商業および貿易の再建、第16章 工業、第17章 農業、第18章 労働、第19章 新經濟政策期後の財政・信用および貨幣、第20章 計畫經濟）

文献目録

索引

### I

われわれの眼前で、いま、世界史が大きく廻っている。そのテンポは東アジアにおける新らしき事態を加えて近來頓に急調子となった。——1929年、Maurice Hindusが自著の冒頭に引いた Bulgakovの言葉、For some a prologue, for some an epilogue. という印象的な言葉の含蓄こそが、20世紀後半の世界史の中で、われわれの歴史的な體驗に溶け込むのであろうか。好むと好まざるとにかかわらず、社會主義は世界の趨勢である。

ソヴェート連邦の社會主義が、言葉の正しい意味にお

ける社會主義であるかどうかは暫らく措く。それは餘りにも「政治的な」問題を含んでいる。ただ、次のことだけはたしかである。すなわち、ソ連の敵たると味方たるとを問わず、今日のソ連は世界の大国であり、世界を二つに分けて對峙する一方の側の指導勢力であること、したがって、ソヴェート體制の本質、その現状、その將來への發展方向を知らずして、われわれは、世界の「今日の問題」を語りえないことだけは、たしかである。その意味において、今日程、ソヴェート連邦についての科學的研究の要求されている時はないであろう。

本書、『ソヴェート經濟制度の發展』《The Development of the Soviet Economic System.》がこのような要求に副いうるかどうかは、以下の書評の中で、判定したい。

### II

ソ連邦生れのメンシェヴィキ（と思う）、Alexander M. Baykovの1922年以來の實直な研究成果を盛った、菊判500頁に餘る、この書物は、イギリスの國立社會經濟調査所 The National Institute of Economic and Social Researchの刊行する叢書、『社會經濟研究叢書』《Economic and Social Studies》の第5巻として出され、「ソ連邦における計畫化の經驗についての一研究」“An Essay on the Experience of Planning in the U.S.S.R.”と副題されている。初版、1946年。翌1947年アメリカで複刻され、上にのべたような up to date な要求の中で1947年10月および1948年2月にそれぞれ版を重ねている。

### III

著者 Alexander M. Baykovは、1917年の「世界を震撼させた10日間」を體驗し、1920年夏、内亂と干涉戰渦中の祖國ソ連邦を見捨ててチェッコに入り、1922年、ブラーグで研究生生活を再開、1927年から1939年まで S.

N. Prokopovich 教授の主宰するロシア経済研究所 The Russian Economic Study Centre of Prof. S. N. Prokopovich の所員、その間 1935 年以後 1939 年までプラハのチェコ工業大学商学部 The Faculty of Commerce of the Czech Technical University of Prague においてソ連経済論講師、その後、イギリスへ移り、国立社会経済調査所 The National Institute of Economic and Social Research で研究をつづけ、バーミンガム大学講師として研究助成金 The Honorary Research Fellowship をうけて本書を完成した。本書の序文は 1944 年 3 月ロンドンで書かれている。

Baykov には本書『ソヴェート経済制度の発展』(The Development of the Soviet Economic System.) 1st. ed. 1946. のほかに、次のような著書、論文がある。<sup>2)</sup>

(1) Development of Industrial Production in the U.S.S.R., *Economica*, Feb. 1941, pp. 94-103.

(2) Experience in the Organization of War Economy in the U.S.S.R., *Economic Journal*, Dec. 1941, pp. 422-38.

(3) A Note on the Trends of Population and the Labour Problems of the U.S.S.R., *Journal of the Royal Statistical Society*, Part IV, 1943, pp. 349-59.

(4) Soviet Foreign Trade. Princeton: Princeton Univ. Press, 1946, 125 pp.

そのほかに、本書の序文によれば、プラハ在住当時『ロシア経済研究所報』The Bulletin of the Russian Economic Study Centre of Prof. S. N. Prokopovich に、その後、「エコノミック・ジャーナル」*Economic Journal*、「エコノミカ」*Economica*、「ロンドン・ケンブリッジ経済研究紀報」*London and Cambridge Economic Service Bulletin* に寄稿した、とあるが、詳細はわからない。本書の中には、これら雑誌論文として発表されたものも含まれている、という。(本書序文 p. XV.)

これらの著書・論文の中、本書と『ソヴェート外国貿易論』(Soviet Foreign Trade.) とは、ロックフェラー財団から海外へおくれたアメリカ版の書物の中にはいっており、わが国では国会図書館へ各 2 部ずつとどき、わ

1) S. N. Prokopovich (Prokopovicz) 教授は 1922 年 6 月ソ連を脱出した経済学者。ソ連専門家。著書に The Economic Condition of Soviet Russia, London 1924, 230 pp. がある。ソヴェート経済に対しては Baykov より以上に批判的である。

2) Harry Schwartz, The Soviet Economy. A Selected Bibliography of Materials in English. Syracuse: Syracuse Univ. Press, 1949, pp. 93. による。

が國の讀者に必ずしも届き得ないものではなくなっている。《Soviet Foreign Trade》については、*The American Economic Review* に Paul A. Baran が、<sup>3)</sup> *The Review of Economics and Statistics* に Paul M. Sweezy が、<sup>4)</sup> review している。この書評の中で、Sweezy の方はかなり好意的に、「分析的というよりはむしろ記述的で、多量の関係統計資料をいれている。」(p. 76) と言っているのに對して、Baran は、同じことを、きわめて鋭く、「バイコフ氏の研究は、ロシアの外国貿易の戦前の歴史についての、相当量の統計的文獻的資料を提供する。だが、右の研究はそれをソヴェートの経済計畫の一般の方針と結びつける點が完全に缺けている。……かくして提示された知識はその興味の大半を失ない、『死んだ歴史』となり果て、世界経済におけるロシアの現在および將來の役割を決定する諸要素析出の道具を提供しない。」(p. 472) と言っているが、本書にではなく同じ著者の別の書物についての、兩人のこれらの評語がそのまま、本書についてもあてはまると思う。本書、《The Development of the Soviet Economic System.》については、*The American Economic Review* に Abram Bergson の review があるが、<sup>5)</sup> そこでも評者 Bergson が Sweezy と同じことを言っている。「この研究は分析的というよりはむしろ記述的である……。」(p. 157)

#### IV

以上の諸評でもわかるように、本書の方法的な特徴は、まず第 1 に、ソヴェートの第一次資料を出来るだけ廣汎に駆使したきわめて誠實・克明な研究である。彼は序文の中で、次の様に言っている。――

「この書物のために、私は、原資料、すなわち、ソ連邦で發表された、諸研究、統計資料、いろいろの便覽、経済學および法律の雑誌、工業雑誌、法令集覽、等々のみを用いた。外國で發表された勞作は、私の觀察や結論を他の著者達のそれらと照合する場合にだけ使用され、事實を記録する際材料には使用されていない。」(p. xiv)

資料の扱いについての彼のこのような態度は、彼自身がソヴェート政府の發表する統計報告その他の資料を、基本的には外國側の資料よりは信頼すべきであると考えていることに由來する。――「私は、ソヴェートの統計を

3) *American Economic Review* Vol. XXXVII, No. 3, June 1947, pp. 470-473.

4) *The Review of Economics and Statistics*, Vol. XXX, No. 1, Feb. 1948, pp. 76-77.

5) *The American Economic Review*, Vol. XXXVI, No. 1, March 1946, pp. 157-158.



の他の資料がほかの國で發表されているものよりは less reliableであるという見解を持たない。反對に、數年間に亘る體系的な研究は、私をして、それらは、諸外國で發表されている同じような資料と同程度の信頼を以て、ソ連邦の經濟過程および經濟制度を分析するために使用し得る、ということ、を、確信せしめるにいたった。(p. xiv)と。

私は、最近アメリカで特に盛んになっているソヴェート研究の現状・傾向を考える時、Baykov のこの態度は、海外からのソヴェート經濟研究としての彼のこの勞作の、方法的特徴の第 1 に數え上げていいものだと思う。ここへ引いた彼の言葉とむすびつけて考える時、本文の中に示されている、彼の、しつこいまでの資料せんさく癖の積極的意義が肯定的に理解されもするし、たとえば Sweezy および Bergson によって「記述的」“descriptive”といわれた彼の方法的方法論的に positive な意義も諒解されると思うものである。

Harry Schwartz, Alexander Gerschenkron, Paul Baran, Abram Bergson などの新しい generation によって代表される、アメリカの、最近、特に第 2 次世界大戰後のソヴェート研究を、ほんの少しでも覗いたことのある人ならば、私の觀察に同意してくれると思うのであるが、アメリカのソ連研究の新しい傾向は、第 1 に自分達のソ連研究を、ソ連の綜合國力調査、經濟力調査としての現状分析論を中心に育てて行こうとする點に在り、そのためには「死んだ歴史」ではなくて、現實の、生き且動いている流れを見極めよう、しかも自分達のイデオロギーをもとにして見きわめようとする傾向が強いことであり、第 2 に、その際、自分達の研究を綜合的な統計分析として進めて行き、ソ連側統計を場合によっては自分達の方法で改訂し、再構成して、自分達の考えに合うような綜合的な統計表を作り上げて行こうとする傾向が強いことである。これと對比してみると、Baykov の方法は、はっきりと區別される。そこから、氣負い立った Baran のさきにあげた批評によって、その一極を代表させられる、Baykov に対するアメリカ學界の獨特な評價が出てくるのである。そういう角度から見るとは、“dead history” は必ずしも Baykov にとって不名譽なものではない。

## V

Baykov は、「現ソヴェート經濟のいろいろの事實、諸政策は歴史的に考察してのみ始めて諒解され得る……」(p. xii) として、「歴史」にはいりこみ、そのためにソヴェート側資料を克明に分析するのである。ところが、彼が、自分の集めた老大な資料を驅使する方法は、我々として

も、必ずしも無條件に賛成しがたいものがある。

たとえば、全卷の構成であるが、彼は、これを、前記の様に、4 部に分けている。第 1 部の取扱う時期は、1917-1921 年、第 2 部のそれは 1922-1928 年、第 3 部のそれは 1929-1934 年、第 4 部のそれは 1935-1940 年である。別の箇所で彼の與えている特徴づけに従うと、第 1 部は轉換期、第 2 部は新經濟政策期、第 3 部は割當制の時期、第 4 部は割當制の廢止より第 2 次大戰の勃發まで、となっている。この時期區分は、一見して、現在ソ連邦で刊行されている多くの歴史書、經濟史書と著しく趣を異にしていることがわかる。ソ連邦で現行の時代區分は、大體において次の如くである。

- (1) 革命前のロシアの經濟
- (2) 10 月社會主義革命の準備期および遂行期 (1917 年 4 月-1918 年)
- (3) 外國の武力干渉ならびに國內戰の時期 (1918-1920 年)
- (4) 國民經濟の復興を旨とする平和的活動への移行期 (1921-1925 年)
- (5) 社會主義工業化のための闘争の時期 (1926-1929 年)
- (6) 農業集團化のための闘争の時期 (1930-1934 年)
- (7) 社會主義社會建設の完成と新憲法實施を旨とする闘争の時期 (1935-1938 年)

この時期區分は、1938 年、『ソ連邦共産黨史(小教程)』刊行以來、ソ連邦において普ねく採用されており、第 1 に、社會主義的生産關係と生産力との發展の段階、第 2 に、労働者と農民との同盟 (smuichka) の發展・形態變化、第 3 に、資本主義との闘争、を基準とし、したがって一定の史觀による時期區分である。

言うまでもなく、上の時期區分は一つの實例を示したものであって、これが最善であるということをお願いするのではない。しかし、ソ連邦のような特殊な經濟體制の發展を考える場合には史觀の問題はかなり注意すべきものであろう。はっきりした史觀で貫かれているという點ではこの方の分類が better であることは言ってもいいだろうと思う。端的に言えば、Baykov の時期區分は何としても無方法のそしりをまぬがれ難いと思う。この時期區分における無方法とは何を意味するか。それを一例をあげて追及してみよう。たとえば、本書の 70 頁で、著者は、「1929 年以後、國內商業においては新經濟政策は廢止され、社會化商業の新制度が完全にとってかわった。」と述べているが、その前後から、こういう交替の原因として著者の擧げているものを拾ってみると、消費財の出廻りの缺乏 (いわゆる goods famine)・商品價



格の騰貴→ration-card system の行きなやみ→私的商業 liquidation の必然性→NEPの廢止→社會化商業制への移行、という序列になる。こういう風に跡づけて行くと、國の經濟の全面的な社會主義化への過程の中における新經濟政策の過渡的な性格も、新經濟政策が成功を収め、その力で商業の社會化へ進んで行くこと、社會主義經濟建設の一環として、商業の社會化が出てきているということは、全然顧みられない。そして、新經濟政策のあとへ ration-card system の時期を、時期區分としておき、しかもその時期の初期、1928年以降暫らくの間の日常消費品の缺乏を重要な經濟的事件として細叙するところは、餘りにも消費する小市民の考え方が露骨である。ソ連邦のように、政府の政策そのものが階級的であることを、政府自らがはっきりことわっている國の、殊に、戰時共產主義から新經濟政策へかけての時期を論ずる際に、そこでくりかえしおこっている goods famine、特に農産物商品化率の減退を、政府の政策と富農および中農との生死の闘争として觀察せずして、一體そこからいかなる結論や見透しがでてくるであろうか。Baykov は、Nep, “scissors” crisis 當時における党内反對派についても語り (p. 59)、價格問題の重要性、goods famine を取扱った黨プレナムの決議 (1927. 2.12) をも引いており (pp. 66-67) ながら、そこから一步ふみ出して、彼自身の頭で考えようとしなない。Baykov の敘述を讀んで行くと、一方に冷たい現實の經濟があり、他方に政府の政策がある。經濟は政治を冷たくおしかえす。——という感じをうける。これでは、Baran とは別の意味で “dead history” と言わざるを得ず、かかる方法で歴史の中へ入り込み、その研究が現状分析および將來の豫測の武器になるとは、無條件には、肯定しがたい。

このような指摘を、全卷に亘ってこまかにのべたてればきりが無い。今、ここではそういう學證をすべて終えたものとして、要約的に言うと、彼の編別構成、彼の分けた1時期から次の時期への轉換の必然性についての彼の説明、等々は、あげられた資料は實に克明であるが、社會主義經濟制度建設史として建國以後のソ連經濟史を見ようとする人々にとっては、必ずしも首肯できないものが多い。

これが本書の缺點であるが、かくして、彼の恣意によってつくられた4つの框の中で、しかもその中で、工業、農業、労働等々ときわめて平凡な小分類を與えた後では、著者は、綿々と、實に綿々と語りつづける。その克明な資料せんさく癖は驚嘆に値いする。かくて、資料自らが、著者を超えて語り出す。たとえば、本書 46 頁には、ゴエルロ・プランを機縁にトロツキーのプラン、ル

イコフのプラン等々を批評したスターリンの手紙が写り込んでいるが、これを讀むと、これらの巨頭連の、後のけわしい對立が、必ずしも突發的なものでもなくすでにこの當時からのものであり、計畫經濟の根本原則に関するものでもあることを、資料自らが語っている。したがって、本書を一つのまとまった經濟史書としてではなく<sup>6)</sup>、reference book として利用しようとするれば、特にロシア語の原資料にめぐまれていないわれわれにとっては、本書は實に立派な、得がたい書物である。

殊に、Bergson もその書評の中で指摘しているように、「管理の組織および方法」administrative organizations and procedures についての敘述は、詳細を極めて居り、本書を個々の事件、個々の制度、等々についての詳述という角度から見れば、われわれを益する所が多い。

特に、最後の一章は、「計畫經濟」“General Planning”と題して (pp. 423-475)、制度史的敘述は詳細を極めており、Pollock の篤實な研究<sup>7)</sup>以後の空白をわれわれの手で埋める場合の一つの有力な資料である。Schwartz が最近作成した、ソ連經濟文献誌も、本書の中から特にこの一章を擧示して、“a useful summary description of the development, organization, and operation of the Soviet planning system” と推賞している。<sup>8)</sup>

## VI

本書の末章で、ソヴェート經濟計畫化の將來の見透しを語りつつ、著者は、「國民經濟の計畫化につきまとう諸困難にわれわれの注意を向けるならば、この仕事たるや超人的なものに思われるかもしれない。」(p. 464) とことわったあとで、「しかしながら、ソヴェート連邦の經驗の示すところによれば、一定の段階における『主導的な諸環』‘leading links’をえらびとり、それらを統御し、國民經濟の主要な諸部門のおもな諸過程を計畫化することによって、計畫經濟 economic planning の道をはばんでいるところの、……(様々の)……困難をも、克服するに充分な經驗を得、効果的な制度を案出することができる、のである。」(p. 464) ということを示している述べている。著者は、更に、計畫化の前途にある諸困難を克服するための要點として、特に、「所期の目標に

6) 本書は Bergson も觸れているように、本書以外のソヴェート經濟史資料についても全然無智ではない、獨立的な、研究者のための、reference book である。——Bergson, op. cit., p. 158.

7) Friedrich Pollock, Die planwirtschaftlichen Versuche in der Sowjetunion 1917-1927. Leipzig 1929. 邦譯がある。

對する國民の熱意 the will を動員し、目標完遂が可能な人間を見つけること」(p. 464) を挙げ、最後にこのような人間類型としての、新しい、ソヴェート・インテリゲンチヤの役割に注意を向けている。

『ソヴェート・インテリゲンチヤ』というこの表現は、深い意味を持っている。……いろいろの經濟的文化的事業で働いている、これら何十萬の人々は、全體として、最初の、二つの、五年計畫を包括する諸年に教育と實際上の訓練とを受けたのである。彼等の間における革命前の知識人の比重は、その數から言っても、諸事件の general course に対する影響力から言っても、negligible である。現代のインテリゲンチヤはソヴェート育ちであり、ソヴェート制度とともに生長してきたものである。その結果として、その法的・社會的および物質的地位は大多數の白襟の労働者 white-collar workers が革命前のインテリゲンチヤを代表していた時のそれとは全く異なっている。新しいソヴェートの知識人が、ソヴェート制度の、現實の經濟・社會問題に立向う態度は、資本主義的國民經濟制度およびほかの國々の社會的諸條件の下で生れ且育った人々のそれとは完全に違っている。ソヴェートの人間のこのような sociological make-up は、外國の研究者がソヴェート經濟制度の、今終わったばかりの發展の過去および將來を分析する場合に常に念頭にとどめおかるべきものである。多くの問題は、この新しいインテリゲンチヤの代表者達には、別の經濟的社會的制度的下で成長した人々にとは違った調子で現われ、彼等は彼等獨特の解決策を案出する。したがって、ソ連邦におこっている發展の研究は、われわれの意見に

8) Harry Schwartz, op. cit., p. 33.

よれば、今日の經濟學・社會學の諸問題のまじめな研究者に對してくめども盡きぬ有益な資料を與えることができる。」(pp. 464-466)

これが、Baykov の、附録をあわせて 500 頁に餘る大著の、結びの言葉である。1917 年の革命以後の Baykov の career と、併せ考える時、この言葉はきわめて含蓄深くひびく。新しい、アメリカのソ連研究者にとっては、このような結語は計畫化問題を取扱った paper の結語としては似合わないと見えるかもしれない。しかしながら、これが、ソヴェートの計畫化とほかの諸國の計畫化とをわかつ、基本的な Merkmal である。少なくともソ連側の考え方からはそうである。老 Baykov はそれをぎりぎりの點まで理解しようとする。Baykov の述べたこの視角は、單に、計畫化のみではなく、今後の世界の政治・經濟・文化の各界に亘ってソヴェートの果す役割を正しく理解するためのかぎでもあると思う。

Ⅶ

以上で、本書の解説をおわる。本書の如く資料的記述的な書物については、數句で以てよくその風貌を伝えることは難い。また、無私且堅忍に、500 頁に餘るこの大冊を與えられた紙白に digest するゆとりも私にはない。そしてその必要も無い。ここではただ、最後に、Baykov についての二つの邦文書評を挙げて、以て、本書評の蕪雜の補いとしておく。——關嘉彦「社會主義の労働政策—バイコフ著『ソヴェート經濟制度の發展』紹介—」『經濟評論』1950年1月號，名和統一「『ソヴェート貿易論』紹介と批評『界世評論』1949年12月號。

參考として、讀者の併せみられんことを願っておく。

創刊號				正 誤 表	
頁	側	行	註	誤	正
9	右	下 2		中 谷 實	一 谷 藤 一 郎
22	右		11) 5	“The First War Budget,”	“The First War Budget Economist,”
27	右	下 2		Vol. CXL	Vol. CXL
28	左		37) 3	ex definitis	ex definitio
29~30	29~30 右~左	29~30 下7~上4		圖中の○印	圖中の◎印
				誤謬にこれを歸した。 <sup>43)</sup>	附帶聲明すら附加されていた。
36	右	下 14		$Q = \frac{\sum q_0 p_1}{\sum q_0 p_0}$	$Q = \frac{\sum q_1 p_0}{\sum q_0 p_0}$
36	右	下 13		$Q = \frac{\sum q_1 p_1}{\sum q_1 p_0}$	$Q = \frac{\sum q_1 p_1}{\sum q_0 p_1}$
38	右	下 9		formula	formula
56	左	上 14		(1) によりては恐慌は……	(1) においては恐慌は
59	左	下 3		構成の高度化、および消費の増加が	構成の高度化と消費の相對的低下とによる消費財需要の相對的低下ということであり、消費の増加が